Otemae University

『死んだ男』における文体的特徴
Some Stylistic Traits in *The Man Who Died*

西　村　道　信
Michinobu NISHIMURA

1．0　本論文の目的

D．H．ローレンスの『死んだ男』（*The Man Who Died*）を題材に取り、作者のテーマである反文明思想、反キリスト教思想について、語学的な面からアプローチしてゆく。特に、譲歩的表現が果たす役割を中心に置き、この作品を理解するために、その他の重要な文体的特徴と作者のテーマとの関連性を見い出そうとするものである。

2．0　作品について

題材に選んだ作品である『死んだ男』は、ローレンスの小説の中でも中編小説に位置するものである[1)]。テキストは Random House の vintage 版を用いた。

この小説は、ローレンスの作家活動の末期の頃の作品で、この頃に書かれたものとして、『チャタレイ夫人の恋人』（*Lady Chatterley's Lover*）や『黙示録』（*Apocalypse*）などがあり、共に作者ローレンスの思想を集大成したものとして、特に大切であると思われる。

ところで、この小説の題である *The Man Who Died* というのは、本来作者ローレンスによって決められたものではない。よくあることであるが、ローレンスの死後、出版者によって付けられた題なのである。最初は作者の付けた *The Escaped Cock* という題で出版されたものであった[2)]。

内容的には、第１部と第２部とに分かれており、第１部は一度死んだ主人公が再び生き返り、この世を一人で歩いて行くことになる。だが、生き返ってはいるものの、その認識があまりにも希薄なままであり、何か読者にとっては完結した感じが得られない。そうは言っても、それが作者の狙いであったのかも知れない。実は、本来の題である *The Escape Cock* はこの第１部で終わっていたのである。そして、第２部の部分は、後になって加筆されたのであった。

第２部では、主人公が肉体的にも精神的にも生き返ったことを実感し、本当の意味での

NII-Electronic Library Service

Otemae University

resurrection を得たことを描き、これによって人間のあるべき姿を描こうとしたのである。

3．0　『死んだ男』におけるローレンスの思想

一度死んだ男が墓から生き返るという、この物語の設定の仕方は、死後3日して蘇ったキリストを暗示するものである。しかしながら、この小説の主人公としての「死んだ男」は、生き返ったとき、これまで行ってきた自らの説教の空しさ以外何も感じられないのである。これは蘇ったというよりも、むしろ未だ死が続いているのに等しいと言っても、過言ではないであろう。

ところが、この「死んだ男」が女神イシスに仕える女性と運命的に出会うこととなり、その女性と結ばれることによって、初めて肉体的にも精神的にも、蘇ることができたのである。いわば、霊肉一体[3]としての新生が実現したことになる。この新生を描くに当たって、女神イシスにまつわるエジプトの神話が挿入されているが、ローレンスは他の作品においても、重要な部分を描く場合にしばしば神話を用いている[4]。この神話の挿入は、単なる退屈しのぎの逸話などではなく、キリスト教と彼の精神を対比させるために必要なのである。イシスという女神は、ばらばらにされてナイル川に捨てられた夫オシリスの亡骸を探し求める女神なのである。この身体を探し求めるというイメージが、ローレンスにはこの作品を描くうえで、一番ぴったりと当てはまるモチーフであると考えていたのであろう。身体無くしては、精神の合一もあり得ないということである。

ところで、ローレンスは近代文明、合理主義、それに則ったキリスト教を批判してはいるが、キリストそのものを否定しているわけではない[5]。そうではなくて、現代のキリスト教では人が救われないことを嘆いているのである。このことは、彼の死生観によく反映されている。人間は死を迎えるに際して、何の恐怖も抱かずにいられるという気持ちを持たせるために、果して、キリスト教がその助けとなるであろうか。おそらく無力となるであろう。「これを克服するには、個人の生死を超えた不可知の無限を信じなければならない」のである[6]。

だが、この信条を理解するにも、今のイギリスの人々や社会は合理主義一辺倒でありすぎて、何よりも観念論的でありすぎる。この如何ともしがたい状況を離脱し、いわばある種の宇宙的エネルギーとの合一を計ることにより、ディオニソス的秘儀[7]に迄到達することこそ肝要なのである。

ローレンスは肉体の合一によって、肉体の蘇りを計り、精神の復活を描こうとした。『チャタレイ夫人の恋人』をどうしても描かなければならなかったのもこのためである。それゆえ、『死んだ男』と『チャタレイ夫人の恋人』とは、共にローレンスにとっては一

NII-Electronic Library Service

Otemae University

体となった小説と言ってもよいであろう。

このような意味からも、『死んだ男』における作者ローレンスの思想は、彼の生涯を通じて、この末期の時期に終結した形となって現れたのだと理解できるのである。

4．0　言語事実による検証

これまで述べてきた事柄を、作品の中に見られる単語や表現を具体的に示すことによって、例証して行くことにする。

4．1　コンピュータの使用

語句の使用法などの検索を効率よく行うために、この作品の本文を予めコンピュータに入力しておいた。検索並びに出力方法に関しては、筆者が以前作成したプログラムを用いている[8)]。

4．2　キーワードの設定

キーワードを探す場合、頻度数が大きいものは特に目立つが、ただ出現回数が多いというだけではキーワードとして価値があるとは言えない。内容といかに深く関わり合いをもっているか、という relevant な要素としての意味があるかどうかをよく確かめることが必要である。とはいえ、多く出現するものは一応マークしておく。

これとは逆に、極めて小さい頻度数の語句であっても、往々にして重要であることがある。テキストを読んでいて、何か心に「カチッとくるもの」（inner click）[9)] があれば、それに注意を注ぎ、その語句や表現が relevant な要素として働いていることを常に確かめながら読み進んで行くという、いわゆる philological circle[10)] を形成していることが重要な条件となるのである。

4．3　譲歩表現に着目 —— yet（７８回）

テキストを読んでみると、譲歩を表す yet の出現率が非常に高いということに気付く。テキスト全体の語数から考えると、この語の使用は極めて多いといえる。本来 yet を譲歩として用いる場合、よく though ～ yet の形で使用されていたものであるが、ローレンスはそういった使い方はせず、専ら yet だけでこの役割を果たすようにしている。though ～ yet の形式を使用すると、後のことを述べる前からもうすでにそれを読者に

NII-Electronic Library Service

Otemae University

連想させてしまう。読者は作者の言おうとすることに新鮮な感じを持たず、何の衝撃も受けないことになるであろう。ローレンスはこの though を使用せず、あるいは極端な場合、文を Yet で書き出したりして、読者の既成概念を根底から覆そうとするのである。

この yet という語を、ローレンスはこの作品中に７８回も使用し（though は１５回）、２律背反、２者対立、精神の葛藤、現キリスト教に対するローレンス自身の信念などを表そうとする気持ちが反映されているようである。

この作品中最も重要なキーワードがこの yet であると考えられ、ローレンスの反文明、反キリスト教思想がここによく反映されており、ローレンスのそのような内的衝動によって、この語の出現率が高くなったと考えられるのである。

この語を中心として、その回りには様々な語句が張り巡らされ、全体として統一の取れた語句の使用法が見られる。 (sample 1)

４．４　関連重要語句

前述の yet と同様に、ローレンスの思想とこの作品を理解する上で、いくつか重要な語句が出現している。

1) cock（５０回）、rooster（５回）

雄鳥（シャモ）という語を多く出現させることで、元気で活気に溢れた自由で無邪気な人間を象徴させようとしている。cock に比べ、rooster は回数が少ない。rooster は cock が立派に成長した場合だとか、cock よりも何か優れた所を表す場合などに使用されている。rooster は「自惚れが強い人」とか「生意気な人」といった意味で一般に使用されている。そして、cock という語は、男性のペニスを連想させるので、一般の言語使用に当たっては、rooster を代用することも少なくない。ところが、ローレンスはこの cock という語を多く使用し、彼の「男根意識」（phallic consciousness）[11] という考え方を打ち出すためにも、cock は最適な語であると言える。 (sample 2)

2) tie（１８回）

この語は何か好ましくないものに縛られていることを表している。即ち、現代のキリスト教に束縛されている、あの哀れな人間達を連想させる。ローレンスの反文明、反キリスト教思想が現れているのである。 (sample 3)

3) bands（２回）、bandages（３回）、bandage(v.)（１回）

これらの語は前述の tie と同様、人間に対する束縛を象徴するものである。この束縛

NII-Electronic Library Service

Otemae University

からすっかり自由の身になってこそ、初めて本当の人間らしさが生まれてくるのである。
(sample 4)

4) touch（４２回）、touch(v.)（２１回）

この語によって、人間は優しさを感じ取ることができるのである。優しさはふれ合いから始まり、霊肉一体へと導かれて行くことになる。 (sample 5)

5) tender（１１回）、tenderness（４回）

前述の touch と並んで、この作品の中核となる語の１つである。ローレンスはこの作品に愛の力の本源としての意味を付与しようとしたのである[12]。 (sample 6)

6) soft（１５回）、gentle（３回）

上記の tender, tenderness と同様に、ローレンスの愛の優しさの表現方法として大きな意味合いがある。 (sample 7)

7) alone（５５回）、aloneness（１１回）

どうしても救われない孤独感、空しさを象徴するかのように、これらの語の出現率が高くなっている。これにより、人間は現在のままでは救われないことを示しているようである。 (sample 8)

４．５　関連重要表現

作者が、主人公に疑問を代弁させることによって、キリスト教に対して独自の見解を明らかにさせている。その場合に、伝達動詞＋to himself という形が非常に多く現れる。主人公が、むしろローレンスが常に自分自身に訴えかけているのでる。himself は合計で５３回も出現している（sample 9）。

これと並んでこの作品には、ローレンスの筆ぐせでもあり、多くの批評家からも指摘されていることであるが、同じ語句の繰り返しが多い。この作品の場合だと、the man who had died という形で主人公を表し、むしろ固有名詞として使用されていると言っても過言ではない。一見すると、この形は非常に長く又冗長であるため、初めて目にする読者は異様な感じを持つかも知れない。他の作品[13]においても、この手法がよくみられる。

しかしながらこの作品に関しては、作者ローレンスもその点を十分承知した上で、末期の作品であってもなおこの表現を使用したのは、それだけ作品への思い入れが深く、どうしてもそうならざるを得なかったということであろう。

NII-Electronic Library Service

Otemae University

ちなみに、表題となっている *The Man Who Died* という関係節が過去形となった形は本文には見られない。それは前に触れたように（→2.0）、ローレンス自身の表現ではないからである。

いずれにしても、ローレンスは the man who had died というように、関係節に過去完了形を使用した形を頻出させることで、読者に主人公が生まれ変わったということを強く心に印象付けようとしたのだと思える。合計この表現は６１回出現している。

(sample 10)

５．０　聖書との関係

ローレンスの思想に関しては、それを述べようとすると当然のことながら、聖書との関係を考慮しなくてはならない。このことは、何もこの作品に限ったことではなく、彼の全作品を通じて重要なテーマなのである。早くは、１９１３年出版の『息子と恋人』（*Sons and Lovers*）においても、随所に聖書への言及が見られる。そして、聖書の逸話や聖書にある表現をもしばしば引用したりしているが、他の作品にあっては、そういったものがかなり皮肉的な要素を帯びていたりするが、本作品中ではそうではなく真正面から描かれている。

ところで、ローレンスは聖書といえば専ら旧約聖書のことである。おそらくローレンスにとっては、旧約聖書の方が新訳聖書よりも人間が神をより身近に感じていたと思っていたからであろう。この非常に自然な形での神と人間との関係こそが、ローレンスにとっては、真にあるべき姿であると考えられたのであろう。ローレンス自身はキリストそのものを否定したのではなく、むしろ真のキリスト教徒になりたかったのである。ローレンスは、「４００年代に生きていたとしたら、私は真の情熱的なキリスト教徒となっていたはずだ」[14] と述べていることからも、そのことが推測される。

さて現代はというと、人間は神からどんどんと離れて行って、神の力を感じることなく、合理主義を至上のものと信じて行動するようになった。その結果、次第に神と人間との間の距離が開いて行き、この人間は利己的で私利私欲に走る生き物となってしまった[15]。この状況をローレンスは何としても本来の姿に戻したかったのである。彼が作品中で使用している Noli me tangere 「私に触れるな」という言葉で、主人公に一般の民衆と生き返った自らとを分離させているのである[16]。

> And he was alone and apart from the little day, and out of contact with the daily people. Not yet had he accepted the irrevocable noli me tangere which separates the re-born from the vulgar. The separation

NII-Electronic Library Service

Otemae University

was absolute, as yet here at the temple he felt peace, the hard, bright pagan peace with hostility of slaves beneath. (p.194)

6．0　結語

ローレンスはデモクラシーに対して反論する見解を多く出しているが、その基盤は『恋する女たち』（*Women in Love*）以後の作品において形成されたのであった[17]。そして、彼は徹底的に「個人」であること、つまり機械文明に毒された大衆の一人にならず、本来の人間としてあるべき姿に戻ることを求めていた。本来の人間の姿とは、神の力を感じ宇宙の神秘に迄たどり着くことなのである。このディオニソス的秘儀を追求して行くためには、現代の人間が求めているような権力によるものではなく、慈愛の精神、他愛の精神（altruism）[18]が根源であるはずである。

しかしながら、現代の人間達はこの精神に欠けている。それはとりもなおさず、キリスト教の教理が間違っているからに他ならない、とローレンスは考えた。キリスト教にはこの慈愛の精神の根源が説かれていない。本来イエス・キリストの教えは現代のようなものではないはずだ。後の人間達がこのようなキリスト教にしてしまったのである。　逆に言うと、この精神の根源が説かれていないことによって、ウイリアム・ブレイクやドストエフスキーと同様に、ローレンスにも又独特の解釈を与えることとなったわけである[19]。

現代のキリスト教は、法によって人間を縛りすぎている。先ず第一に、人間を縛り過ぎないことだ。というのも、キリスト自身が法によって行動したのではなく、心の中の衝動によって行動したからである[20]。

それゆえに、人間も法によってではなく、心の中から湧き出る優しさによって行動すべきなのである。もともとキリスト教は愛の精神から始まったはずであるから、この姿に戻すことを考えねばならない。現代のキリスト教は、このような気持ちを抱かせるには余りにも観念論的に走りすぎている。agape という概念に縛られ、肉体がないがしろにされている。ローレンスはこの肉体の解放こそが最も重要であると考えた。そして、それは彼の phallus 賛美へと移って行く。ローレンスは「へび」のイメージを扱うことが多いのであるが[21]、へびはこの象徴とも言えるのである。

何よりも先ず、これまで閉ざされていた肉体を解放し、肉体の交わりによって愛の力の本源を受け入れ、霊肉一体となってディオニソス的秘儀にまで到達することなのだ。このローレンスの図式は、彼の全作品の中でも、*The Man Who Died* においてこそ、「死」と「蘇生」によって、キリスト教的愛がローレンスの愛へと移行してゆくという点で、ローレンス自身が、自らの思想とキリスト教との調和を保つことを目指した作品であると言えるであろう。

NII-Electronic Library Service

Otemae University

SAMPLE 1

e lustrous with the sun's burnishing; yet always tied by the leg with a string.
henomenal world, which is raging, and yet apart. And I have not seen it, I was t
e went away, perturbed and shattered. Yet as she went, her mind discarded the bi
I cannot speak to them, for I am not yet ascended to the Father. And I must lea
me coloured and tangible, evanescent, yet deathless in their coming. The man who
ondering why he should be travelling, yet driven by a dim, deep nausea of disill
low, he slept, for he was very tired. Yet during the night the cold woke him, pi
come back, to be alone in the midst. Yet even now he did not go quite alone, fo
ard. But the hope was cunning in him. Yet even this was as men are made. So when
slipped back to earth like one dead, yet far too quickly for anything dead. The
of contact with the daily people. Not yet had he accepted the irrevocable noli m
e repulsive, a slow squalor of limbs, yet he felt a certain compassion. He passe

⋮

SAMPLE 2

oused by the shrill wild crowing of a cock just near him, a sound which made him
he man asked him: "Why do you carry a cock?" /"I am a healer," he said, "and the
he man who had died killed the common cock of the yard. Then the man who had die
ter!" called the peasant. "My escaped cock!" /The man addressed, with a sudden f
ers, then the peasant had the escaped cock safely under his arm, its wings shut
om its white chops. /"It's my escaped cock!" said the peasant, soothing the bird
lucked and scratched, and the escaped cock, caught and tied by the leg again, co
ouched him. He saw a black and orange cock on a bough above the road, then runni
greenness, came the black and orange cock with the red comb, his tail-feathers
he blue invisible, a black and orange cock or the green flame-tongues out of the

⋮

SAMPLE 3

with the sun's burnishing; yet always tied by the leg with a string. And the sun
in the helpless humiliation of being tied by the leg. The day the ass stood swi
re the peasant, in great disquietude, tied up the cock. The man with the waxen f
string, gave a tug and a hitch of his tied leg, fell over for a moment, scuffled
that of the young cock, which he had tied by the leg, would never glow in him.
e me the cock that escaped and is now tied by the leg. For he shall go forth wit
with all his wings and feet, and they tied a cord round his shank, fastening it
stening it against the spur; and they tied the other end of the cord to the post
boding kind of knowledge, that he was tied by the leg. /He no longer pranced anc

⋮

SAMPLE 4

ed up. His face was banded with cold bands, his legs were bandaged together. Onl
m his face, and push at the shoulder bands. Then they fell again, cold, heavy, n
sum= 2
ned up, and the great world reeled. Bandages fell away. And narrow walls of rock
hands rose and began pushing at the bandages of his knees, his feet began to sti
he caution of the bitterly wounded. Bandages and linen and perfume fell away, an
sum= 3
nded with cold bands, his legs were bandaged together. Only his hands were loose
sum= 1

NII-Electronic Library Service

Otemae University

SAMPLE 5

ound him. There was nothing he could touch, for all, in a mad assertion of the e
ll at his feet to kiss them. /"Don't touch me, Madeleine," he said. "Not yet! I
, the man who had died said: /"Don't touch me, brother. I am not yet risen to th
"Not yet! I am not yet healed and in touch with men." /So she wept because she d
hen I am healed, and ... and I am in touch with the flesh." /The words faltered
my desire has died, and I am not in touch anywhere. Yet how do I know! All at l
uld go now," he said to her. "Do not touch me, I am in death. I shall come again
o her, and turned away. He could not touch the little, personal body, the little

⋮

SAMPLE 6

ouching the sun. Best of all was her tender desire for him, like sunshine, so so
ir touch. Yet this girl of Isis is a tender flame of healing. I am a physician,
this tender girl. The flame of this tender girl! Like the first pale crocus of
ve no healing like the flame of this tender girl. The flame of this tender girl!
reat gods are warm-hearted, and have tender goddesses." /The woman wrapped herse
im, and in her gentle lingering, her tender hanging back from him, he knew a cha
chafed his feet with oil and tender, tender healing, he could not refrain from s

⋮

SAMPLE 7

der desire for him, like sunshine, so soft and still. /"She is like sunshine upo
at him for a moment in fear, from the soft blue sun of her eyes. Then she lowere
tle, then the rougher heath, then the soft, bushy heath-tips on top, for a bed.
with fat hips and shoulders, on whose soft, fairish-orange body the last sun twi
oping now, looking at the scar in the soft flesh of the socket of his side, a sc
d the gods?" she said, with a certain soft fury, touched with exasperation. So t
r sharp rays of bliss, and offers her soft, gold depths such as no other flower

⋮

SAMPLE 8

nd there is nothing to say, and I am alone within my own skin, which is the wall
stood the low white villa, white and alone as the coast, overlooking the sea. Bu
of the temple, yellow and white and alone like a winter narcissus, stood betwee
ave I to save? ... I can learn to be alone." /So he went back to the peasant's h
wanted no one, for it was best to be alone; for the presence of people made him
ls the advance. Now is my time to be alone." Therefore he went on more to the ga

⋮

SAMPLE 9

But the man who had died thought to himself: /"Why, then, should he be lifted up
m. Yet the man who had died said to himself: "He is my host." /And at dawn, when
ce. He felt her glance, and said to himself: /"Now my own followers will want to
d quickly, and went away, saying to himself: /"Now I belong to no one and have n
spass or compulsion. For he said to himself: /"I tried to compel them to live, s
sunny day. And always he thought to himself: /"How good it is to have fulfilled

⋮

SAMPLE 10

ked into the dead-white face of the man who had died. That dead-white face, so s
o the sky of spring above. /But the man who had died could not look, he only lay
. And now she was frightened of the man who was alive, but spoke nothing. /He op
to cry out the triumph of life. The man who had died stood and watched the cock
d's leg, they were not cut off. The man who had died looked nakedly on life, and

⋮

NII-Electronic Library Service

Otemae University

注

1) 小説の分類に関しては、種々の方法が考えられるが、Heinemann の Phoenix 版によると、長編小説は novel、中編小説は short novel、短編小説は short story となっており、『死んだ男』は short novel に入っている。

2) W.T.Andrews ed.: *Critics on D.H.Lawrence*, p.109, Florida, 1971

3) 西村孝次：『ロレンスの世界』p.189、中央公論社、1970

4) 拙稿："特定作家の文体研究"、『英語英文学研究とコンピュータ』斉藤俊雄編、英潮社、1992

5) M.Spilka ed.: *D.H.Lawrence*, pp.101ff., New York, 1963

6) 金谷展雄：『ロレンス論』p.181、南雲堂、1988

7) W.T.Andrews ed.: *Critics on D.H.Lawrence*, p.114, Florida, 1971

8) 拙稿："特定作家の文体研究"、『英語英文学研究とコンピュータ』斉藤俊雄編、英潮社、1992

9) L.Spitzer: *Linguistics and Literary History* p.7, New York, 1962

10) ibid., p.20

11) M.Squires & D.Jackson ed.: *D.H.Lawrence's "Lady"* p.67, Georgia, 1985

12) M.Spilka ed.: *D.H.Lawrence*, p.105, New York, 1963

13) *The Man Who Loved Islands*, etc.

14) M.Spilka ed.: *D.H.Lawrence*, p.102, New York, 1963

15) W.T.Andrews ed.: *Critics on D.H.Lawrence*, p.102, Florida, 1971

16) ibid., p.111

17) M.Spilka ed.: *D.H.Lawrence*, p.101, New York, 1963

18) ibid., p.102

19) W.T.Andrews ed.: *Critics on D.H.Lawrence*, p.113, Florida, 1971

20) ibid., p.113

21) 拙稿："特定作家の文体研究"、『英語英文学研究とコンピュータ』斉藤俊雄編、英潮社、1992

参考文献

A.Aitken et al: *The Computer and Leterary Studies*, Edinburgh, 1973

R.Allen: *A Stylo-Statistical Study of 'Adofl'* ,Paris, 1984

W.T.Andrews ed.: *Critics on D.H.Lawrence*, Florida, 1971

A.Bell ed.: *Selected Literary Criticism*, London, 1956

C.Butler: *Computers in Linguistics*, Oxford, 1985

C.Butler: *Statistics in Linguistics*, Oxford, 1985

R.Fowler: *Essays on Style and Language*, London, 1966

S.Hockey: *A Guide to Computer Applications in the Humanities*, London, 1980

G.M.Hyde: *D.H.Lawrence*, London, 1990

A.Ingram: *The Language of D.H.Lawrence*, London, 1990

A.Jones et al: *The Computer in Literary and Linguistic Studies*, Cardiff, 1976.

A.Kenny: *The Computation of Style*, Oxford, 1982

D.H.Lawrence: *Selected Literary Criticism*, London, 1956

Letters, London, 1932

F.R.Leavis: *Thought, Words and Creativity*, London, 1976

NII-Electronic Library Service

Otemae University

M.Spilka ed.: *D.H.Lawrence*, New York, 1963
M.Squires & D.Jackson ed.: *D.H.Lawrence's "Lady"*, Georgia, 1985
J.Worthen: *D.H.Lawrence*, London, 1989
金谷展雄：『D. H. ロレンス論』南雲堂、1988
柴田多賀治：『ロレンス文学の世界』八潮出版社、1974
西村孝次：『ロレンスの世界』中央公論社、1970

NII-Electronic Library Service